### 特別講演

# ヴィクトリア時代のスポーツとジェンダー —— 周縁化された女性たちの戦略——

香 川 せつ子

#### はじめに

スポーツを文化としてとらえ、歴史的考察の対象とみるのは、それほど古くからのことではないように思える。ピーター・バークは、『文化史とは何か』において、「文化」は「曖昧な概念」であると語り、芸術や科学など「高級文化」に加えて民族音楽や民間医療、広範な技芸や慣習行為までを意味するようになったと述べているが、そこにスポーツへの言及はない¹。身体の活動である運動やスポーツと、精神的活動の所産を意味する狭義の文化との間隔が埋まったのは、「身体の歴史」の登場とも関連するだろう。スポーツを社会生活の諸局面との関連で把握し、歴史的に考察する「スポーツ史」が本格化するのは1980年代のことであり、以後、カルチュラルスタディーズの影響を受けて、階級、権力、国家、ジェンダーなどの分析概念を用いた研究が活発に行われ、近年は身体文化 (physical culture) という領域概念が頻繁に使用されている²。

本稿では、スポーツ史の領域における先行研究をふまえつつ、ヴィクトリア時代のスポーツにおけるジェンダー境界線とその変化を、女性の経験と教育に焦点をあてて検討する³。以下では、まずヴィクトリア時代におけるスポーツの実態を概観し、ミドルクラスのヘゲモニーのもとで成立した近代スポーツのジェンダー構造とその社会的文化的背景について考察する。次に、スポーツが近代的女子学校のなかに浸透する過程を追跡し、女性校長たちのスポーツへの態度と思想、それに基づく実践を検討する。最後に、これらの動きの合流点として、女性体育教師マルチナ・バーグマン

『ヴィクトリア朝文化研究』 第18号 (2020年)

=オスターバーグ (Martina Bergman-Osterberg, 1848-1915) の実践をとりあげる。スウェーデン出身の一女性が、なぜ、どのようにしてイギリスの教育界に地歩を固め、「女性の身体教育のパイオニア」と称されるようになったのか。オスターバーグの戦略と女性教師たちのネットワークを明らかにする。

近代スポーツ成立の陰で周縁化された女性たちが、徐々にフロンティアを開拓し領域を拡張した過程を考察することを通して、ジェンダー境界線の変化のダイナミズムとその要因を探りたい。

## I. ヴィクトリア時代のスポーツと女性

#### (1) 近代スポーツの成立とアスレティシズム

ヴィクトリア朝の人びとにとって、スポーツはどのようなものだったのだろうか。1868年に作家アンソニー・トロロープ (Anthony Trollope, 1812-1885) は、『イングランドの娯楽とスポーツ (British Sports and Pastimes)』(1868年)の冒頭で、スポーツを「イングランド人 (Englishmen)、(正確にはイングランドの男性)の気質にとって本質的に大事」であると評し、「生活と国民性に明白な影響を与えるほどに人気のある」スポーツとして、狩猟、射撃、釣り、ヨット、競艇、登山、競馬、クリケットをとりあげている。彼によれば、闘鶏、アナグマいじめ、鷹狩は「過去にはイギリス的であったが、今では知る人も少なく消滅同然」であり、半世紀前に盛んであった懸賞ボクシングは、もはや「大半の人から忘れ去られた」。 他方でトロロープは、近年勢いを増したスポーツとしてフットボールにも目をやり、それは荒々しさと熱烈さで有名になっているが、狩猟や射撃、あるいはクリケットや競艇に匹敵する威厳 (dignity) をもたず、「偉大なイギリスのゲーム (the great British Games)」に含まれないとしている⁴。

この一文が描き出すのは、1860年代のイギリススポーツ界の状況と同時に、当代の人気作家トロロープのスポーツへのまなざしである。彼が「イングランド人のスポーツ」として承認しているのは、18世紀以前から貴族や上流階級が広大な領地で行う贅沢なレジャーであり、有閑階級のステータス・シンボルともいえる娯楽だった。他方では、フットボールなどの新しいスポーツの流行も無視できないが、それらは「偉大なイギリスのゲー

ム」に含めるに足りないと境界線を引いている。時はまさに農村の娯楽であったボール蹴りが、パブリック・スクールの校庭に舞台を移して、若者の人気スポーツに躍り出ようとするさなかだった。トロロープに馴染みの18世紀的レジャーや娯楽が、ミドルクラスのヘゲモニーのもとで、近代スポーツに移行する過渡期だったのである5。

19世紀後半のパブリック・スクールにおける集団スポーツ競技とその行 動原理ともいうべきアスレティシズムが、近代スポーツ成立の土壌となっ たことはよく知られる。18世紀まで地域により形態も方法も不統一だっ たフットボールが、成文化されたルールの下で勝敗や記録を競う集団競技 となったのは19世紀中葉である。1845年のラグビー校に発したといわれ る集団スポーツ競技は、瞬く間にイングランド全域に普及してパブリック・ スクール間の対抗競技が盛んとなった。村岡健次によれば、アスレティシ ズムとは、「運動競技、わけてもクリケット、フットボール(サッカーとラ グビー)、ボートといった集団スポーツを人格陶冶のための有効な教育手 段として重要視する態度」のことであり、これらの集団スポーツへの参加 が「男らしさ、忍耐力、協調的集団精神、フェアプレイの精神を養う」と 考えられた6。全寮制パブリック・スクールでは、ハウスとプリーフェク ト制度と並んで、スポーツが少年たちにジェントルマンとしての資質を養 う人格教育として奨励された。トマス・ヒューズ (Thomas Hughes ,1822-1896) の小説『トム・ブラウンの学校生活』(1857年) は、主人公トムがラグ ビー校での学寮生活とスポーツを通してジェントルマンに成長していく姿 を描いた半自伝的小説であるが、大ベストセラーとなりアスレティシズム を世に知らしめた。パブリック・スクールから大学へと進学する過程でエ リート男性が身につけたアスレティシズムの精神は、1870年代以降の帝国 主義を支えるイデオロギーとなり、海外へと送り出されたジェントルマン とともに世界に伝播した。

イギリスのジェントルマン教育に感銘し、アスレティシズムに心酔した 外国人のひとりが、フランスの男爵ピエール・ド・クーベルタン (Pierre de Coubertin, 1863-1937) である。『トム・ブラウンの学校生活』を愛読した彼 は、1883 年から 1888 年までにラグビー校をはじめとするパブリック・ス クールを数回訪問して、イギリスの中等・高等教育に関する論文を発表し た<sup>7</sup>。クーベルタンのフランス帰国後の活動が、1896年の第1回オリンピック大会開催へと結実し、「近代オリンピックの祖」としての名声を後世まで不動のものとした。パブリック・スクールのアシレティシズムを念頭に、オリンピック精神を「騎士道精神」と「美的観念」に求めた彼は、女性のスポーツについて次のように語ったといわれる。

女性のスポーツは『自然の法則』に反しており、人間の眼に映る中で最も悪趣味なものである $^8$ 。

オリンピックは男性のため、男性アスレティシズムの荘厳さと、周期的な心的高揚のために確保されなければならない。女性の称賛はそれへの褒賞である<sup>9</sup>。

19世紀末にかけて静かに広がった女性のスポーツは、クーベルタンが希求する「騎士道精神」とは無縁であり、オリンピックの荘厳なる祭典に相応しいものではなかった。スポーツを愛する女性は、男性アスリートの演技に拍手喝采を送る観衆の役を期待されたのである。近代スポーツは、実践と理念の両面において「男性モデル」の身体活動として成立した。スポーツによって培われるとされた人格一忍耐、協調的集団精神、フェアプレイの精神等一もまた、ジェントルマンに要求される資質である。女性の身体活動は、レディに求められた人格一清純、従順、優美等一を超えてはならず、男女のダブル・スタンダードは当然視された。

近代オリンピックにおける女性の位置づけは、その後の参加状況からも推しはかられる。1900年のパリ大会ではテニスとゴルフで非公式な参加が認められ、12人の女性が1319人の男性選手に交じって演技した。1904年のセントルイス大会ではテニス、ゴルフ、アーチェリーの3種目で8人、1908年のロンドン大会ではテニス、アーチェリー、フィギュアスケートで3か国43人の女性選手が出場している。いずれも出場全選手の1%から2%に過ぎず、1948年のロンドンでの2回目の大会まで10%を超えることはなかった $^{10}$ 。

## (2) ヴィクトリア時代の女性とスポーツ

1898年に『スポーツウーマン叢書 (Sportswoman's Libraries)』を編集したフランシス・スローター(Frances Slaughter)は、ヴィクトリア朝後期の女性のスポーツ人口の拡大をとらえて、「スポーツにおける女性の復権」と称した<sup>11</sup>。彼女の言うところでは、中世に貴族階級の女性は男性の娯楽である野外レクリエーションに同伴していたが、18世紀以降、女性の領分が家庭に囲い込まれるにつれてその場面から姿を消した。ところが、いまや小説の女主人公が狩猟場や川沿い、クローケーの芝生、ゴルフ場に登場することは珍しくない。しかし、実際にはスポーツを経験したことのない女性も多いことから、狩猟、射撃、釣り、アーチェリー、スケート、ゴルフ、クローケー、テニス、サイクリング等の魅力とプレイ法を女性プレイヤー自身の言葉で語り、スポーツへと誘ったのがこの叢書である。

スローターの著作が示す通り、19世紀末にかけて女性のスポーツへの関 心は顕著だった。小説ばかりでなく、1880年から1900年までに48種類も 発行された女性向け雑誌でも、スポーツ記事が頻繁に登場した。1880年に 創刊された『ガールズ・オウン・ペーパー (Girls'Own Paper)』にも、1881年 11月号では乗馬が、1882年10月号ではテニスが挿絵入りで紹介されてい る <sup>12</sup>。エイダ・バリン (Ada Ballin, 1863-1906) が 1898 年から 1907 年まで発 刊した月刊誌『女性(Womanbood)』では、文学や科学、健康等と並んでス ポーツは人気の話題であり、30種類以上の女性のスポーツが紹介されてい たという<sup>13</sup>。女性スポーツ人口の拡大に拍車をかけたのが、1890年代にお ける自転車の大流行である。女性が自転車に跨り走る姿に眉をひそめる者 がいても、流行は止められなかった。1896年にある医師は、女性の自転 車乗りを既定事実と受け止め、「競争や記録を追求することは好ましくな いが、楽しみや健康のためなら無害である」と論評している14。1890年代 半ばに刊行された女性向け自転車ガイドは多くの広告で埋められ<sup>15</sup>、軽快 な服装で颯爽と走る姿はNew Woman のシンボルとなった。ヴィクトリア 朝後期には、中流階級以上の女性たちが自由な時間を利用して、旅行や都 会の百貨店でのショッピング、芝居や美術の鑑賞、社交バザーなどを愉し んでいたといわれるが、スポーツもまた女性の生活に彩りを添えたのであ る<sup>16</sup>。

ヴィクトリア時代の女性のスポーツも男性と同様に階級性を帯びている。 貴族や上流階級からミドルクラスへのヘゲモニーの移動が、女性のスポーツ参加層の拡大を生み、レジャーから競技スポーツへの移行をもたらした。 女性の間に広がったスポーツの起源は多様であり、狩猟や射撃、釣り、アーチェリー、スケートなど、旧来は上流階級女性が男性に随伴して楽しんだ野外レクリエーションが中流階級へと普及したもの、テニスやクローケーなど郊外に住むミドルクラスの庭での社交や娯楽が競技化したもの、ホッケーやクリケットなど近代的女子学校を通して普及した集団競技に大別しうる<sup>17</sup>。

1898年7月18日の『パンチ (Punch)』誌の挿絵は、女性に人気のスポーツが、1860年代のクローケーから、1870年代のスケート、1880年代のテニスへ、そして1890年代のホッケーへとシフトしたことを描く。しかし、テニスとホッケーとの間にはこの絵では伝えきれない隔壁があった。オリンピックの例でいえば、テニスやスケートは早期に女性のプレイが認められたのに対し、1908年のロンドン大会以降の公式種目であるホッケーは男性競技とされ、女性の参加は1980年のモスクワ大会まで実現していない<sup>18</sup>。ヴィクトリア朝の人びとにとって、勝敗を争う集団競技ホッケーと、社交に由来するテニスとは異種のものであった。ホッケーが女性の間に急速に浸透する回路を開いたのは、後述するように19世紀後半の女子中等学校と女性カレッジである。

# (3)健康への関心と身体観の変容

ヴィクトリア時代における女性スポーツの拡張は、身体への社会的まなざしの変化にも関係していた。身体史は身体を社会的文化的構築物と捉えることを前提とするが、近代スポーツの繁栄の背後には、ヴィクトリア朝社会特有の身体観があった。'A Sound Mind in a Sound Body'という古くからの格言が、ヴィクトリア朝の人びとの間に蘇り広く受容されたのである。スポーツを人格陶冶の有効な手段とするアスレティシズムは、トマス・ヒューズやチャールズ・キングズリー(Charles Kingsley, 1819-1875)等の支持層をえて、筋肉的キリスト教 (Muscular Christianity)と呼ばれる思想集団を形成し、その活動は小説、評論から労働者大学運動や社会改良運動に



図1 女性スポーツの過去と現在 (Punch, or the London Charivari, June 18 1891) 出典:K.E. McCrone, Sport and Physical Emancipation of English Women 1870-1914, 1988)

まで及んだ<sup>19</sup>。

男性の身体に関する言説が、一貫して、強さや逞しさ、筋肉や力を強調 したのに対して、ヴィクトリア時代の女性の身体に関する思想や言説は社 会の様相とともに変化し、医学や生理学からの「科学的」見解が錯綜して 現れ、道徳や教育をめぐる問題とも結びついて論争が続いた<sup>20</sup>。ヴィクト リア女王が即位した1830年代に、女性の身体は不健康と虚弱を特徴とし ていた。上流階級の女性は、運動不足とコルセットで腰や胸を締め付ける 服装、不自然な姿勢がもとで、脊椎湾曲などの形態異常を発症し、眩暈 や気絶にしばしば見舞われた。女性の不健康は生理不順や不妊につなが るとの危機感から、メディカル・アドバイスブックや室内で簡単にできる エクササイズの教本が出回るようになる。ドナルド・ウォーカー(Donald Walker) は、男性向けエクササイズ読本 『男性の身体運動 (Manly Exercises)』 (1834年)で、歩く、走る、跳ぶ、跳躍するなどの動きとボートや乗馬な ど野外スポーツを、イギリス男性の身体構造と嗜好に適したやり方で説明 して好評を博した。その女性版『レディのためのエクササイズ (Exercises for Ladies)』(1836年)では、少女や女性たちの脊椎湾曲と虚弱体質を矯正する ために、生理学に基づく立ち方や座り方、歩き方を紹介している<sup>21</sup>。ガス タヴァス・ハミルトン (Gustavus Hamilton) による『少年のための体操と若 いレディのための美容体操の初歩 (The Elements of Gymnastics for Boys and of the Calisthenics for Young Ladies)』(1840年)もまた、筋肉の鍛錬を目的とする 男子向け体操と、女性特有の身体美をつくるための美容体操を区別して教 える通俗本である<sup>22</sup>。

ヴィクトリア時代の人々の健康への関心は、帝国の膨張につれて切迫したものとなった。急速な工業化と都市化がもたらした貧富の拡大、労働者階級の貧困とスラム街の形成、工場での長時間労働による過労、不衛生な住環境と栄養失調等は都市を疫病のるつぼとした。とりわけロンドンを頻繁に襲うコレラ感染と死者の増加は、都市犯罪の増加と相まって社会不安を増大し、上流・中流階級の生活をも脅かした。1848年の公衆衛生法の制定等による下水道の整備を中心とした環境の改善が図られる一方で、栄養や運動による体力増強が疾病予防のための国民共通の課題となった。労働者家庭への衛生指導が始まり、1870年の初等教育法を契機に労働者階

級の子どもへの身体訓練が導入された。1884年にサウスケジントンでヴィクトリア女王と皇太子のパトロネイジのもとで開催された万国衛生博覧会は400万人もの入場者を集め、イギリスの衛生と浄水の技術が披露された。

19世紀末にかけて、アジアやアフリカの植民地をめぐる大陸諸国との競争が激化すると、国民の健康問題はソーシャル・ダーウィニズムと結びつき、国家の盛衰や民族の存亡にかかわる緊急課題として意識されるようになる。帝国の政治経済や軍事を担う男性の体力増強が叫ばれる一方で、女性に求められたのは「健康な男性を産み育てるための健康な身体」である。ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)は、『生物学の原理』(1867年)で、女性が妊娠、出産、授乳、養育という母としての役割に耐えうる身体をもつことを「適者生存」の見地から重視し、少女たちの運動不足に警鐘を鳴らす一方で、精神や頭脳の緊張もまた生殖機能に弊害をもたらすと論じた<sup>23</sup>。ソーシャル・ダーウィニズムが席巻するなかで、不妊や不健康は女性本人や家族の領域を超えて、国家や社会が解決にあたるべき問題となっていく。医療、衛生、科学、教育等様々な立場から、女性の身体強化の必要が指摘され、それは後述するように、女性のスポーツの追い風となったが、同時に女性の活動を制限する障壁ともなった。

#### Ⅱ. 女子教育におけるスポーツと身体教育の展開

#### (1)女子教育における身体教育の導入

ヴィクトリア時代のパブリック・スクールと大学におけるスポーツ競技の隆盛は、大英帝国の栄華のシンボルとして近代スポーツの歴史を華やかに彩る。上流・中流階級の少年たちがパブリック・スクールや大学で学業と集団生活を通したジェントルマン教育を受けたのに対して、少女たちの教育の場は家庭であり、母やガヴァネスによりレディとしてのたしなみをしこまれた。前述したように、1830年代頃から女性向けエクササイズの教本が市場に出回り、ダンベルを用いた軽微な体操が紹介されたが、男性向け教本のようには売れなかった。女性がレジャーや娯楽以外の目的で、スポーツや運動を意図的かつ組織的に行う必要を認識したのは、知育を標榜する女子学校の校長たちである。

その先駆は、フランシス・メアリ・バス (Frances Mary Buss, 1827-1894)

のノース・ロンドン・コリージト・スクールである。1850年の創立時より一貫して女性の知的教育を柱とした同校では、生徒の健康に配慮して美容体操(Calisthenic)を取り入れていた。1860年代にエミリ・デイヴィス(Emily Davies, 1830-1921)による女子教育改革運動が高揚し、公開競争試験への女性の受験が許可され、大学学位を目標とする女性カレッジが設立されると、バスは生徒たちに受験と進学を奨励した。知育における高度な目標の設定は、それに耐えうる身体訓練の必要を生み、ドイツ式体操やダンベル体操、バドミントンの競技が導入され、1880年には専用の体育館が完成した。1890年にはスポーツ競技のクラブが結成されている<sup>24</sup>。

他方、カリスマ女性校長としてバスと並び称されるドロシア・ビール (Dorothea Beale, 1831-1906) は、人格教育という観点から競争に反対し、チェルトナム・レディーズ・カレッジに競技スポーツを導入することには 消極的であった。下層中産階級出身のバスの学校が同じ階層の少女たちの経済的自立を意識したのに対して、チェルトナムは、生徒の90%が軍人や外交官、法律家や牧師や医師の娘であるレディのための学校である。知性と信仰心を備えたレディを育てるというビールの教育理念は、競争やアスレティシズムとは相いれなかった。彼女が生徒たちに奨励したのは歩行や乗馬などのレディの戸外活動であり、1880年代には新流行のスウェーデン体操を導入した。ビールが、競技スポーツの教育的価値を「他の人たちとの共同活動や即座の判断力を開発する」と評価するのは1890年代になってである25。

高等教育に目を転じれば、ケンブリッジ大学とオックスフォード大学でジェントルマン文化の象徴となっていたスポーツは、女性カレッジでもアカデミックな学業を支える「隠れたカリキュラム」として摂取された。ガートン・カレッジの創立者エミリ・デイヴィスは、「男性が最高学府で享受する教育」と同等の教育を通して最高の知性を備えたレディを育成することを理想とした。そのために古典語学習とケンブリッジ大学学位試験の受験が義務付けられたが、スポーツも「レディらしさ」を逸脱しない範囲で奨励された。学生にとってスポーツをすることは、「自分だけの部屋」をもつことと同様の特権であり、勉学の緊張から心身をリフレッシュする行動だった26。初期の女性カレッジで最も人気を博したのがテニスであり、1878年

にはガートンとニューナムとのテニス対抗試合が行われ、1883年にはオックスブリッジの4つの女性カレッジ間での対抗試合も開かれている<sup>27</sup>。

ホッケーはスピードとチームワークで勝敗を競うアイルランド発祥のスポーツであるが、1880年代中頃にオックスブリッジの女性カレッジに紹介された。たちまち女子学生の人気スポーツとなり、卒業生を通して女子中等学校にも浸透した。1895年には全イングランド女性ホッケー協会(All England Women's Hockey Association)が結成されている<sup>28</sup>。

# (2) 女子パブリック・スクールのスポーツ熱一女性版アスレティシズムと ソーシャル・ダーウィニズム

1860年代のトーントン委員会による勧告と1871年の女性教育全国連合の結成を経て、バスやビールの学校をモデルとする近代的な女子中等学校が、英国全域の主要な都市に急速に普及した。スポーツはこれらの女子校に積極的に取り入れられて学校文化の一翼を形成していくが、19世紀末にかけてはソーシャル・ダーウィニズムの影響を強く受けて、スポーツを教育方針の中心におく学校も出現した<sup>29</sup>。1885年に開校したローディン校は、その設立趣意書にこう記している。

本校の目的は、身体的、知的、道徳的に徹底した教育を施すことである。 オーバーワークから保護するために特別な骨折りが図られ、毎日2時間から3時間が戸外のエクササイズやゲームに充てられる。水泳、乗馬、ダンス、体操の機会が設けられる。

生徒たちは家事に関心をもつよう奨励され、家庭経済や裁縫が教えられる。 授業科目には、聖書の歴史、英語英文学、古代語と現代語、歴史、地理、 自然科学、数学、図画、学級唱歌、独唱、ピアノ、バイオリンが含まれる。 生徒たちのために上記の科目から固有の教育課程が編成され、上級の生 徒は、ニューナムとガートンの女性カレッジ向けの準備も可能である<sup>30</sup>

身体教育が知育、徳育の前に置かれ、そのために一日2時間から3時間が費やされることに驚きを禁じ得ない。また家事系科目と家政学が奨励される一方で、ケンブリッジ大学女性カレッジの受験準備も行われている。身体訓練を前面化しないまでも、知的能力、家政能力の強化と合わせて教

育の三本柱とすることは、この時期の女子校に一般的だった。

1877年に設立されたセント・アンドルーズ校は、スコットランドで最初にスポーツを取り入れた女子校である。校長のルイザ・ラムズデン(Louisa Lumsden, 1840-1935)、教師のフランシス・ダブ(Jane Frances Dove, 1847-1942)、コンスタンス・メイヤード(Constance Mayard, 1849-1935)はいずれもケンブリッジ大学ガートン・カレッジの初期の学生であり、チェルトナム・レディーズ・カレッジで教鞭を執った女性たちである。セント・アンドルーズ校では、男子パブリック・スクールと同様のハウスやプリーフェクト制度が設けられ、すべての生徒に毎週1回以上のスポーツが義務づけられた。1882年に二代目校長ダブの就任時に、広い運動場をもつセント・レナズにキャンパスを移動し、冬季にはゴールズやラウンダーズ、夏季にはクリケット、テニスのハウス対抗戦が行われた。1891年にスウェーデン体操、1895年にはホッケーが導入されている<sup>31</sup>。

ダブがスポーツ信奉者としての本領を発揮するのは、1896年にバッキンガムシャーに設立したウィコム・アビー校においてである。彼女は、男子パブリック・スクールをモデルに、女性のシチズンシップの育成を目標に据えた。チェルトナム・レディーズ・カレッジのビール、ウィコム・アビー校のダブ、オックスフォード女子ハイ・スクールのルーシー・サウルスビー(Lucy Soulesy, 1856-1927) 3人の女性校長による著作『女子学校における課業と競技』が1898年に刊行されたが、その第2章「身体の開発」で、ダブは次のように述べている。

家族の利己主義に浸っている女性は恥ずべき市民である。善き市民となるためには、広い関心、規律と組織、「団結心('esprit de corps')」、集団的行為の力が不可欠である。今、女性教師こそが、これらの行動規範を女性たちに教える最大の機会をもっているのであり、女性教師はぜひ自分の特権と責任を十分に認識していただきたい。男性たちはこれらの美徳を、学校やカレッジでだけでなく、人生のほとんどすべての段階で自分のものとする。しかるに、比較的少数の女性しか組織的な職業に就くことはなく、ましてやカレッジ生活の恩恵を受ける女性は極めて少ない。したがって、女性たちに、他の人々と共同して、公益のために個人性を没する力を得る機会をもっているのだと教えることは、学校にかかっている。(中略)集団

的生活の行動規範は毎時毎分身につけるものだが、運動場ほどに完全な場所はない。クリケット、ホッケー、ラクロスなど大人数で組織性のある競技が、この目的に最もかなっている<sup>32</sup>。

女性の関心が家庭内にとどまることを「利己主義」と戒め、競技スポーツにおける集団精神の涵養を唱道するダブの理念に、「家庭の天使」の面影は薄い。男子パブリック・スクールを範とするウィコム・アビー校において、知的教育と競技スポーツ、ハウスやプリーフェクト制度はセットであり、その目標は女性版アスレティシズムというべき、「善き市民」となるための教育であった。

マンチェスター・女子ハイ・スクールの校長として、女性校長協会 (Headmistresses Association) の会長を務めたセーラ・バーストール (Sara Burstall, 1859-1939) は、1907年の著書『イングランドの女子ハイ・スクールーその目的、組織と経営』において、ソーシャル・ダーウィニズムを思想的基盤に、女子中等教育がスポーツと身体教育に力を割く理由を語っている。

我々が知的、道徳的教育を成功させようとするなら、良い身体の習慣をもつように訓練された健康な身体が必要である。· · · · (中略)

戦時における身体適合検査に耐えうるために、この国の男性にとって重要なのは身体の強壮さと活動力――動的なエネルギーである。女性の生命力と受動的な力――潜在的エネルギー――は、もっと重要である。なぜならば、自然は女性を兵士の母となるよう命じているからである。

これゆえに、知的にも、個人的にも、国家的にも、すべての理由から、女子ハイ・スクールは当初から少女たちの健康な身体状態を護り、身体に良いことを最大限に計画する責務を負っていた。競技スポーツや体操の女性に取り入れるのはこれらの理由からであり、それはイギリスの伝統である野外での生活を、上流階級の限られた人たちからあらゆる階級の人びとへと広げるのに役立った——それはヴィクトリア時代における最も目覚ましい社会変化のひとつとなっている<sup>33</sup>。

フェミニストでもあり愛国主義者でもあるバーストールの主張は、多かれ少なかれ他の女性教育者の意見を代表し、国家や国民から歓迎されるも

のでもあった。

ソーシャル・ダーウィニズムにおける「健康な母体による国家への貢献」の思想は、女性のスポーツや身体教育を推進する根拠となったが、他方でそれを抑制する理論ともなった。ロンドン女子医学校出身の女性医師アラベラ・ケナリー (Arabella Kenealy, 1859-1938) は、優生学思想から女性性 (womanhood) を礼賛する著述家でもあった。彼女は、スポーツによる筋肉の強化が、その代償として女性から美や品性を奪い、文明化された人類に退化をもたらすと主張した。雑誌『19世紀 (Nineteenth Century)』では、生理学や優生学を根拠として、スポーツが少女の性格や容貌に与える変化を次のように表現する。

彼女の動きは男性的になり、女性的ではなくなった。静かで優美であったのが、粗野になり露骨になった。声が低くなり、口調も強くなった。彼女はすべてを口に出すようになり、相手の想像に任せることがなくなった。 (中略)

彼女はもはや妻や母ではなくなるであろう。しかるに、女性らしさを持ち続けることは、彼女自身にも共同体にとっても計り知れない重要性をもつ。なぜならば、女性性 (womanhood) は進化がもたらした素晴らしい功績であり、それを損なうことは罪に価する<sup>34</sup>。

ケナリーは、男女の身体的精神的差異は人類の進化の指標であり、差異が大きいほど文明化された状態であると考えた。彼女は、筋肉の過度な鍛錬は人体の自然な生理に反するという見解から、男性のスポーツ過熱にも警鐘を鳴らしている。しかし、女性のスポーツ熱は個人の身体に害を及ぼすだけではなく、社会全体を「野蛮」状態に戻す行為であると批判した。スポーツに熱中した結果、女性の体格や生理が変化するだけではなく、容姿や性格の変化ももたらして、性的な魅力を奪うという女性医師の警告が、女性や女性教師を不安に導いたことは想像に難くない。

これまでみてきたように、19世紀前半までのスポーツは上流階級女性の特権であり、レジャーや社交の一形態であった。近代スポーツは集団競技とアスレティシズムを特色に上流・中流階級男性のものとして成立した。階級とジェンダーによって周縁化された女性のスポーツの失地回復に貢献

したのは、女性教育のパイオニアたちである。スポーツは、女性がアカデミックな学問に取り組むための補助柱として女子教育に定着した。女性のスポーツに社会的意義が付与されるのは、19世紀末のソーシャル・ダーウィニズムと帝国の拡大によってである。「産み育てる身体」の強化を国家や種族の存亡と結合した言説は、女性のスポーツブームの追い風となった。しかしそれは、「頭脳や身体の酷使は生殖機能を破壊する」という理由から、女性の学問やスポーツを抑制し阻害する勢力ともなった。医学や生理学、進化論や優生学に基づく「科学的」見地からのスポーツ是非論が交差するなかで、身体教育固有の論理からスポーツの教育的意義を主張し、身体教育を専門とする教師の養成に着手したのが、スウェーデン出身の女性教師マルチナ・バーグマン=オスターバーグである。以下では、彼女の多岐にわたる活動を素描することを通して、女性教師たちによるスポーツ戦略のヴィクトリア時代における終着点をみることとしたい。

# Ⅲ. 女性体育教師オスターバーグの身体教育戦略

#### (1)ロンドン体育女性監督官への就任―スウェーデン体操の普及

バーグマン=オスターバーグが、ロンドン学務委員会から初等学校の身体教育女性監督官 (Lady Superintendent of Physical Education in Girls and Infant Schools) に任用されたのは、1881年のことである。これまでみてきたように、1880年前後はパブリック・スクールや大学で競技スポーツの全盛期であり、遅れて普及した女子中等学校や女性カレッジでも知的教育を推進する補助柱としてスポーツが導入された時期であった。他方、工場で働く労働者階級の子どもたちはスポーツとは無縁であり、19世紀初頭から増加した宗教団体設立の学校は読み・書き・計算と聖書を教えることを目的としていた。1870年の初等教育法によって学務委員会が設立した学校では、子ども達の健康や衛生を重視し、ドイツで軍隊向けに開発された器械体操や教練が男子に実施された。同時に、女子にも適した運動として、健康増進に重点を置くスウェーデン体操の導入が決まり、指導者をスウェーデン王立中央体操専門学校 (the Royal Central Gymnastic Institution) から招聘することになった 35。大陸諸国の中でも工業化に後れを取り列強からの脅威に晒されていたスウェーデンでは、軍事力強化のための身体訓練は

国家的課題だった。1813年に設立された同校は、医師であるリング(Per-Henrik Ling, 1776-1839)が開発したスウェーデン体操のメッカであった<sup>36</sup>。リングによる体操の特徴は解剖学と生理学に基づく科学的な身体運動という点にあり、教育体操、軍事体操、医療体操、芸術体操という4つの領域から構成された。王立中央体操専門学校は軍事体操と医療体操に力点を置く男子校として設立されたが、1864年に教育体操と医療体操に限定して女性に門戸を開いていた。1881年に同校を卒業したバーグマンは、学務委員会二代目の女性監督官として着任することになる。

バーグマン=オスターバーグの渡英前の前半生については多くを知られていない<sup>37</sup>。メイの研究によれば、スウェーデン南部スコーネ地方の農夫バーグマンの娘として生まれ、成人後はガヴァネスや司書を経験したのちに、1879年に31歳で王立中央体操専門学校に入学した。ガヴァネスの不安定な待遇を経験したバーグマンにとって、同校で取得できる免許状は職業的自立の手段として重要だった。生理学と解剖学を科学的基礎に、医療と教育を目的とするスウェーデン体操は、高価な用具なしに室内で行える運動であり、イギリス社会が抱える健康問題一労働者階級の子どもの栄養不良や発育不全、中流階級の少女の脊椎湾曲や虚弱体質一を解決する有効な方法となりうる。イギリス国民の身体強化への切迫したニーズと学校と家庭における健康指導の遅れが、無名のスウェーデン女性に格好のチャンスを提供したのである。

バーグマン=オスターバーグはロンドン学務委員会監督官の任務を 1888 年まで続け、目覚ましい成果をあげた。初等学校女性教師対象の講習会を通して、1312人の教師にスウェーデン体操の原理と実践を伝授し、276の学校に普及させたとされる  $^{38}$ 。それに加えて公開の場でのデモンストレーションも頻繁に行った。最初の大舞台となったのは、1883年にナイトリーで開催された集団演習コンクールであり、皇太子夫妻を主賓に、ケイ=シャトルワース (Sir James Kay-Shuttleworth)、マンデラ (Anthony Mundella, 1825-1897)、フォスター (William Forster, 1818-1886) 等、教育行政の高官が列席した。そこでバーグマンは、ロンドンの小学校の4歳から7歳までの少女 100人をリボンつき帽子と垢抜けたユニフォームで登場させ、集団行進を披露して拍手喝采を浴びた  $^{39}$ 。さらに前述した 1884年の万国衛生博

覧会では、メイン会場となったクリスタルパレスの東中央ギャラリーにスウェーデン体操館を設けて、チェルシーの女子児童がスウェーデン体操を2か月間定期的に実演し金メダルを受賞した<sup>40</sup>。学校教師への指導、大舞台でのパフォーマンス、マスコミの報道を介して、スウェーデン体操と監督官バーグマンの名は教育関係者に知られるようになった。1887年のクロス委員会に彼女は身体教育の専門家として召喚され、スウェーデン体操が人体の構造や生理に基づく科学的方法であること、広い運動場や特別な道具も必要とせず、どこでも、誰にでもできる運動であることを説明し、専門的教師養成の必要をアピールした<sup>41</sup>。

# (2) ミドルクラス女子教育への転換—スウェーデン体操と競技スポーツの結合 1885年監督官在任中に、バーグマンはロンドン北部の高級住宅地ハムステッドに土地を購入して、身体教育の専門家を育成するカレッジ (Hampstead Physical Training College and Gymnasium、創立時からの名称は一定していない。以下では、オスターバーグ・カレッジと略称する)を設立した。体育監督官としての実績、そこで築いた人脈と資金が独立した事業に踏み切らせたのだろう。その翌年にストックホルムの学校教師エドウィン・オスターバーグ (Edvin Osterberg) と結婚し、以後マダム・オスターバーグがバーグマンの通称となった。

バーグマン=オスターバーグが学校設立に着手した目的は、スウェーデン体操の原理と技術を系統的に修めた専門家の養成であった。その念頭にあったのは、スウェーデンにおける体育教員養成制度であり、スウェーデン王立中央体操専門学校の教育である。彼女が身体教育指導者になるに相応しいと考えたのは、中等教育に進学可能な学力を備えた中流階級家庭の少女であった。新設された学校の入学要件は、学力試験と授業料の両面で中流階級向けに高く設定されており、教育内容や環境も中流階級のニーズに応じるよう工夫された。前章でみたように、19世紀末に蔟生した女子中等学校では、知育とスポーツを通して近代的レディの育成が目指されていた。ヴィクトリア朝社会の中流階級文化を取り入れることなしに、新しい学校の成功は望めない。オスターバーグ・カレッジでは、生徒の全人格的教育を目標に、解剖学、生理学、スウェーデン体操の理論と実習に加えて、

テニスやファイブズが教育内容に含まれた<sup>42</sup>。スウェーデンで生まれたリング式体操中心の教育を、イギリスの中流階級文化に適用したオスターバーグ独自の身体教育が誕生したのである。その後ホッケーやクリケットが追加され、アメリカ発祥のバスケットボールを女性向けに改変したネットボールが開発されるなど競技スポーツの比重は増大した。

他方、女子学校の側でも、スウェーデン体操のもつ医療衛生的側面は女生徒の体格改善や体力強化という点で重要なものであり、また女子生徒に競技スポーツを指導できる教師は一部の学校を除けば不在だった。オスターバーグは、体育専門教師を置くことの有益性と新設カレッジの特色をアピールするために、女子中等学校が存在する都市を巡回してデモンストレーションを行った。チェルトナム・レディーズ・カレッジやセント・レナズ校では、いち早く1880年代末にスウェーデン体操を取り入れた。オスターバーグ・カレッジは、1895年にケント州のダートフォード、キングズフィールドに移転し、中流階級女子学校と同様の寄宿舎と庭、運動場を備えてダートフォード身体教育カレッジ (Dartford College of Physical Education)、別称キングズフィールド・カレッジ (Kingsfield College) と名称を変えた43。

#### (3) 女性教育者との連携と国際ネットワーク

創立から1915年までの30年間に、オスターバーグのカレッジは多くの女子教育機関に卒業生を送り出した<sup>44</sup>。そのリストには、まずケンブリッジ大学のガートン・カレッジとニューナム・カレッジ、スコットランドのセント・アンドルーズ大学とグラスゴー大学、ウェールズのカーディフ大学などの名門大学が名を連ねる。さらに、アメリカで1885年に新設されたブリンマー・カレッジとバルティモア女子カレッジも含まれている。

次のグループは教員養成カレッジであり、ここで注目すべきは、最初の女子中等教員養成機関であるケンブリッジ・トレーニング・カレッジである。校長エリザベス・ヒューズ (Elizabeth Phillips Hughes, 1851-1925) は、チェルトナム・レディーズ・カレッジで教鞭を執り、ケンブリッジ大学ニューナム・カレッジで学んだ経験をもっており、女子中等学校の教師を養成する立場から、オスターバーグの理念とスウェーデン体操に共鳴した<sup>45</sup>。初等教員養成関係では、ロンドンにあるマライア・グレイ・トレーニング・

カレッジ、デイ・トレーニング・カレッジ、ホワイトランド・トレーニング・カレッジ、ブリストル、リヴァプール、グラスゴーなどの地方都市にある教員養成カレッジを含めて、18の初等教員養成機関に卒業生が就職した。また、ロンドンやリーズ、マンチェスター、エディンバラ等、20の州や市の学務委員会にも、体育監督官や指導主事として就職している。

しかし、最も多くの卒業生の就職先は女子中等学校であり、チェルトナ ム・レディーズ・カレッジやセント・レナズ校などの寄宿制女子パブリッ ク・スクールのほか、リーズ、リヴァプール、ヨーク等イングランド北部 の都市やスコットランドのエディンバラに設立された通学制女子ハイ・ス クール、さらにはスウェーデンやフィンランドの北欧諸国の学校も加えて 100校以上にのぼる。これらの女子中等学校はまたオスターバーグ・カレッ ジ入学者のリクルート先ともなり、卒業、就職を通したリンクも生まれた。 オスターバーグの身体教育を媒介とするネットワークは、国境を超えて 海外にも延伸している。1893年にシカゴ・コロンブス万国博博覧会に付随 して開催された世界教育会議 (World Congress on Education) では女性教育 分科会が設けられ、エリザベス・ヒューズがイギリス代表を務めたが、オ スターバーグも参加した<sup>46</sup>。彼女は、この渡米の機会にスウェーデン王立 学校の卒業生ポッセ (Nils Posse, 1862-1895) によりスウェーデン体操が導 入されたボストン体操師範学校 (Boston Normal School of Gymnastics) を 訪問している<sup>47</sup>。また1899年にロンドンで国際女性評議会(International Council of Women) が28 か国からの代表を集めて開催されたとき、オス ターバーグは「女性と教育」分科会で、健康衛生に関する科学的知識に基 づき身体教育を指導できる女性教師養成の必要を訴えた<sup>48</sup>。

オスターバーグのネットワークは直接・間接に日本にも及んだ。1901年、ケンブリッジ・トレーニング・カレッジ退職後に来日したヒューズは、女子教育視察のために全国を巡回した際に、女性への身体教育の必要を説きスウェーデン体操を紹介した<sup>49</sup>。当時日本の教育界では国力強化を目的として学校での体操教育に力を入れ、ドイツ式とスウェーデン式とがしのぎを削っていた。文部省が体操教育視察のために欧米に派遣した留学生の一人に、後に高等師範学校教授として体育界の重鎮となる永井道明がいた。1906年に日本を出発した彼は、ボストン体操師範学校、スウェーデン王立

体操専門学校に各1年在籍する傍ら、1907年にオスターバーグのカレッジを視察した50。オスターバーグと意気投合した永井は、1912年に女子高等師範学校助教授二階堂トクヨを推薦してオスターバーグ・カレッジに留学させた。二階堂は同カレッジで1年3か月学び、スウェーデン体操とスポーツ、一般教養を通した人格教育に感銘を受けた。オスターバーグは、二階堂との別れ際に、自校キングズフィールド・カレッジの名にちなみ「日本にクイーンズフィールド・カレッジをつくりなさい」と激励したという51。ヒューズ、永井、二階堂とのつながりから、オスターバーグの視線の果てにアジアの存在を感じるが、彼女は一年後にその生涯を閉じる。二階堂は帰国後に女子高等師範学校教授に昇任するも、オスターバーグ・カレッジで体験したリベラルな校風と幅広い身体教育は、永井が求める定型的な体操指導との葛藤を招く。1922年、同校を辞職した二階堂は、オスターバーグの理念を標榜する二階堂体操塾の設立へと進んだ。

#### おわりに

ヴィクトリア時代における男性スポーツの隆盛は大英帝国の栄華のシンボルであったが、女性のスポーツもまた静かなブームを迎えていた。貴族や上流階級の特権であった狩猟や釣り、アーチェリーなどの野外レクリエーションが中流階級女性にも広がり、19世紀末にはテニスやゴルフを楽しむことは女性の新しい生活スタイルのひとつになった。スポーツが階級とジェンダーの境界を犯して浸透した背景にあったのは、女性の教育機会の拡張を図る女性教師者たちの戦略である。

近代的女子教育の成立過程において、スポーツは、一方では教育の平等と身体の解放を求める要望から、他方では「頭脳と精神の緊張は女性の健康を害する」というオーバーワーク論者への防波堤として導入された。女性校長や教師たちのスポーツへのスタンスは一様でもなければ、固定してもいなかった。それは、一方では女性の社会的平等と自立を追求するフェミニズム、もう一方では女性の母性と国家への貢献を強調するソーシャル・ダーウィニズムとのかかわりによって異なる様相を呈した。女子教育のパイオニアが緩やかに共有したフェミニズムは、世紀後半にかけてソーシャル・ダーウィニズムの影響を色濃くする。女性の身体と健康を種族の繁栄

と結びつける言説に依拠して、多くの女子学校が身体教育を知育、徳育に 並ぶ人格教育の柱とした。他方で、ソーシャル・ダーウィニズムは、女性 の身体機能を生殖に特化し制御することで、身体活動に制限を加えるイデ オロギーとしても作用した。男子パブリック・スクールの花形競技フット ボールは、その活動の激しさが女子生徒の生理に及ぼす影響を懸念して、 女子学校には取り入れられなかった。

オスターバーグは、スウェーデンで発達した身体教育システムをイギリ スの社会や教育の実態に即して、転移、修正、補充をすることで成功を収 めた。その第1は、スウェーデン体操の柔軟な活用である。彼女のイギリ スでの実践はスウェーデン体操を初等教育に導入し、労働者階級の子ども に普及することから始まった。しかし、中流階級にターゲットを充てたカ レッジの設立によって、スウェーデン体操とスポーツ競技を接合したオス ターバーグ独自の身体教育へと改変された。スウェーデン体操の生理学と 解剖学に基づく医療的側面は、ソーシャル・ダーウィニズムが発する警告 に有効に応えるものであり、女子学校が抱える健康衛生管理とスポーツ競 技とのジレンマを解消する手立てとなった。第2は、身体教育を専門とす る教師の養成である。スウェーデンでの経験から、イギリスにおける身体 教育の遅れが指導者の不在にあると感知したオスターバーグは、男性に先 駆け、また国家に先駆けて、女性の身体教育専門教師の養成に打って出た。 女性の生理を理論だけでなく身体でもって知る女性の指導者こそが、女性 の身体活動に適切な助言をすることができ、女性に相応しい身体運動を促 進することによって、スポーツのフロンティアを開拓できるとの考えが根 底にあったと思われる。アメリカ発祥のバスケットボールはオスターバー グによってイギリスに持ちこまれ、女性むけに改造されたネットボールと なって、オスターバーグ・カレッジから大英帝国植民地へと普及した<sup>52</sup>。 第3は、身体教育を通した女性教師とのネットワークである。オスターバー グ・カレッジの卒業生の就職先は、イギリス全域の女子学校と教師養成機 関に及んだ。そのネットワークは、教育と女性に関係する国際会議への参 加、外国からの視察・留学の受け入れにより、海外にも延伸していた。近 代的女子教育機関で増大する身体教育や競技スポーツの人気に対して、オ スターバーグが放った矢の影響は大きかった。科学、プロフェッション、

ソーシャル・ダーウィニズム、国際化といったヴィクトリア時代の思想と 文化の特徴を、彼女の戦略のなかに垣間見ることができる。

本稿では、ヴィクトリア時代のスポーツにおけるジェンダー境界線の変化を、中流階級女子教育が果たした役割に着目して考察し、オスターバーグの身体教育実践がもつ意義を検討した。オスターバーグは、オスターバーグ連盟の結成やスウェーデンの女性参政権運動への支援などの社会的活動も展開しており、トータルな実践の基底にあったフェミニズムや身体教育思想についての考察を要する。また、スウェーデン体操の日本への影響や二階堂トクヨの帰国後の実践などトランスナショナルな視点からの検討も重要である。本稿のテーマを超えるこれらの課題については、機会を改めて論じることにしたい。

#### 註

- 1 ピーター・バーク著(長谷川貴彦訳)『文化史とは何か』(増補改訂版)法 政大学出版局、2010 年。(*Peter Burke*, *What is Cultural History*?, 2<sup>nd</sup> Edition, Polity Press: Cambridge, 2008.)
- 2 Baker, William J. 'The State of British Sport History,' Journal of Sport History, 16-1, 1983, 53-66. 池田恵子「英国スポーツ史研究の潮流——30 年の歩み——」『西洋史学』(235) 2009 年 12 月、58 69 頁。市橋秀夫「英国におけるスポーツ史研究のこれまでをふりかえって」『一橋大学スポーツ研究』30 号、2011 年、67-84 頁。Annett Hoffman & Gerald Gems, Global Perspectives on Sport and Physical Cultures, London: Routledge, 2018.
- 3 ヴィクトリア時代のスポーツと女性、ジェンダーに関する主要文献として、以下のものがある。Sheila Fletcher, Women's First: The Female Tradition in English Physical Education, 1880-1980, London: Athlone Press, 1984. J. A. Mangan & Roberta J. Park (eds.), From 'Fair Sex' to Feminism: Sport and Socialization of Women in Industrial and Post-Industrial Eras, London: Frank Cass, 1987. Kathleen E. McCrone, Sport and the Physical Emancipation of English Women, 1870-1914, London: Routledge, 1988. Jennifer Hargreaves, Sporting Females: critical issues in the history and sociology of women's sports, London & New York: Routledge, 1994. Sheila Scration and Anne Flintoff (eds.), Gender and Sport: A Reader, London: Routledge, 2002.
- 4 Anthony Trollope, British Sports and Pastimes, 1868, 1-4. トニー・メイソン著

(松村高夫・山内文明訳)『英国スポーツの文化』同文館、1991 年(Tony Mason, *Sport in Britain*, London: Faber and Faber, 1989.)参照。

- 5 松井良明『近代スポーツの誕生』講談社現代文庫、2000年。石井昌幸「イギリス―近代スポーツの母国」坂上康博・中房敏明・石井昌幸・高橋航編著『スポーツの世界史』 一色出版、2018年、所収。
- 6 村岡健次「『アスレティシズム』とジェントルマン一十九世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて一」村岡健次・鈴木利章・川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987 年、所収。 J. A. Mangan, *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School: The Emergence and Consolidation of an Educational Ideology*, London & Portland: Frank Cass, 2000.
- 7 阿部生雄『近代スポーツマンシップの誕生と成長』 筑波大学出版会、2009 年。 坂上康博他、前掲書。有賀郁敏他『スポーツ』 ミネルヴァ書房、2002 年
- 8 Hargreaves, Sporting Females, 1994, p.209.
- 9 ibid.
- 10 Hargreaves, Sporting Females, 219-220.
- 11 Frances E. Slaughter, Sportswoman 's Library, 2vols, 1898.
- 12 'How to Ride', *The Girls Own Paper*, no.100, Nov. 26, 1881. 'How I Learned to Play Lawn Tennis', *The Girls Own Paper*, no.146, Oct. 14, 1882. 川端有子『復刻版ガールズ・オウン・ペーパー 別冊 解説・見出し記事一覧』ユーリカ・プレス、2006 年を参照。ガールズ・オウン・ペーパー誌上にスポーツや健康に関する記事が増加するのは 20 世紀初頭以降であり、次の文献に詳しく分析されている。Alison Enever, 'How the Modern Girl Attains Strength and Grace: the Girl's Own Paper, sport and the discipline of the female body 1914-1956', *Women's History Review*, 24-5, 2015, 662-680.
- 13 Cartriona M. Parratt, 'Athletic "Womanhood": Exploring Sources for Female Sport in Victorian and Edwardian England,' *Journal of Sport History*, 16-2, 1989, 140-157.
- 14 W.H. Fenton, 'A Medical View of Cycling for Ladies', The Nineteenth Century, 39, 1896, 796-801. David Rubinstein, 'Cycling in the 1890s', Victorian Studies, 21(1), 1997, 41-58.
- 15 E.J. Erskine, *Bicycling for Ladies*, London: IL. Iffe &Sons, 1896. L. C. Davidson, *Handbooks for Lady Cyclists*, London: Hay Nisbet Co., 1896.
- 16 エリカ・ダイアン・ラパボード著(佐藤繭香・成田芙美・菅靖子監訳)『お 買い物は楽しむため―近現代イギリスの消費文化とジェンダー』彩流社、 2020 年。(Erika Diane Rappaport, *Shopping for Pleasure*, New Jersey: Prince University Press, 2020.)

- 17 June A. Kennard, Woman, Sport and Society in Victorian England, unpublished Dissertation Edu. D, The University of Carolina, 1974. 池田恵子「英国女性スポーツ史研究にみるジェンダー空間の分析」『スポーツとジェンダー研究』 14 号、2016 年、58-69 頁。
- 18 Hargreaves, Sporting Females, p. 212.
- 19 村岡健次、前掲書。
- 20 Dyhouse, Carol, 'Social Darwinistic ideas and the Development of women's education in England, 1880-1920, *History of Education*, 5-1, 1976, 41-58. 香川セつ子「医学と女子高等教育の相克ーヴィクトリア時代の「女性の身体」」望田幸男・田村栄子編『身体と医療の教育社会史』、昭和堂、2003 年所収。香川せつ子「19 世紀末イギリスの大学における女子学生の健康問題―「オックスブリッジ女子卒業生への健康統計調査」を中心にして一」『西九州大学子ども学部紀要』第3号、2012年、39-49頁。
- 21 Donald Walker, Exercises for Ladies: Calculated to Preserve and Improve Beauty and to Prevent and Correct Personal Defects, Inseparable from Constrained or Careless Habits: Founded on Physiological Principles, London: Thomas Hurst, 1836.
- 22 Gustuve Hamilton, The Elements of Gymnastics for Boys and of Callisthenics for Young Ladies, London: A.K. Newman, 1840.
- 23 Harbert Spencer, The Principles of Biology, 1867.
- 24 The North London Collegiate School 1850-1950, London: Oxford University Press, 1950, p.46 & p.49.
- 25 Gillian Avey, *Cheltenham Ladies: A history of The Cheltenham Ladies' College*, London: James & James, 2003, 71-84.
- 26 香川せつ子 「女性の高等教育――フェミニニティへの挑戦と妥協」 河村貞 枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006 年所収。
- 27 Kathleen E. McCrone, 'The 'Lady Blue': Sport at the Oxbridge Women's Colleges from their Foundation to 1914', *British Journal of Sports History*, vo.3, no.2, 1986, 191-215.
- 28 Edith Thomson, Hockey as a Game for Women, 1905.
- 29 Kathleen E. McCrone, 'Play up! Play up! And Play the Game' Sport at the Late Victorian Girls' Public Schools', in Mangan & Roberta(eds.), From Fair Sex to Feminism: Sport and the Socialization of Women in the Industrial and Post-Industrial Eras London and Now York: Routledge, 1987
- 30 Dorothy E. de. Zouche, Roadean School 1885-1955, printed by private circulation, 1955, p.27.
- 31 St. Leonards School 1871-1927, printed by University Press, Oxford, 1927, 78-98.
- 32 Jane Frances Dove, 'Cultivation of the Body', in Dorothea Beale, Lucy

- H.M. Soulsby and Jane Frances Dove, Work and Play in Girls 'School, London: Longman: Green and Co. 1898, 401-402.
- 33 Sara Burstall, English High Schools for Girls: Their Aims, Organization, and Management, London: Longman, Green, and Co. 1907, 90-91. バーストール の経歴と活動については、次の文献を参照のこと。堀内真由美『大英帝国 の女教師―イギリス女子教育と植民地』白澤社、2008 年。中込さやか「19世紀末から 20世紀初頭のイギリスの女子中等学校における家政学の導入――セーラ・A・バーストールの著作を再読する」『女性とジェンダーの歴 史』 2 号、2014 年、3-14 頁。
- Arabella Kenealy, 'Woman as Athlete' *The Nineteenth Century*, vol.45, 1899, 633-645 & 915-929.
- 35 McIntosh, Physical Education, 1968, 77-125.
- 36 Suzanne Lundvall, 'From Ling Gymnastics to Sport Science: The Swedish School of Sport and Health Sciences, GIH, from 1813 to 2013,' The International Journal of the History of Sport vol.32, no.6, 2015, 780-789.
- 37 オスターバーグの生涯と実践について最も詳細な記述は、Jonathan May, *Madam Bergman-Osterberg*, University of London Institute of Education, London: Harrap, 1969. Jonathan May, M.Ed., 'The Bergman-Osterberg Physical Traning College', in McIntosh, *Physical Education*, 1968, 287-296. Fletcher, *Women's First*, 20-41.
- 38 May, Madam Bergman-Osterberg, p.24.
- 39 ibid., 16-17,
- 40 ibid., p.21.
- 41 ibid., 29.
- 42 ibid., 34-36.
- 43 University of Greenwich, The First Hundred Years of Higher Education in Kent: A History of the Dartford Campus, 1955.
- 44 May, Madam Bergman-Osterberg, 137-141.
- 45 Pam Hirsch & Mark McBeth, History of Teacher Training at Cambridge: The Initiatives of Oscar Browning and Elizabeth Hughes, London: Woburn Press, 2004.
- 46 May, Madam Bergman-Osterberg, 58-59. Hirsch & McBeth, History of Teacher Training, p.198. 世界教育会議の女性教育部会の成果として出版された次の図書では、ヒューズが序文を寄せ、オスターバーグとオスターバーグ・カレッジが紹介されている。Christina Sinclair Bremner, Education of Girls and Women in Great Britain, London: Swan Sonnenschein & Co. Lim., 1897, v-xii, 192-195.

- 47 May, ibid.
- 48 オスターバーグは、「女性と教育」部会に「職業としての身体訓練 (Physical Training as a Profession)」と題するペーパーを提出した。Anne Bloomfield, 'Martin Bergman-Osterberg (1849-1915): creating a professional role for women in physical training, 'History of Education, 34-5, 2006, 517-534. 国際女性評議会については、河村貞枝『国際女性評議会(ICW)の創設―国際的女性運動の始まり』アティーナ・プレス、2004年。
- 49 Pam Hirsch & Mark McBeth, *History of Teacher Training at Cambridge*, 2004, 200-201. Ikeda Keiko, 'British Cultural Influence and Japan: Elizabeth Philipps Hughes' Visit for Educational Research in 1901-1902', *The International Journal of the History of Sport* 31-15, 2014, 1925-1938. 大野延胤「E. P. Hughes in Japan (1901-1902)」『学習院大学文学部研究年報』第 36 号、1989 年、323-346 頁。
- 50 西尾達雄·油野利博「永井道明の国民体育論」『体育学研究』 40 号、1995 年、205-220 頁。
- 51 二階堂トクヨ『足掛四年英国の女學界』二階堂学園 昭和50年復刻版(東京宝文館、大正6年)207-208頁。 西村絢子「二階堂トクヨの師マダム・オスターバーグ(Madame Bergman Osterberg)の生涯とその女子体育思想」『日本女子体育大学紀要』第8巻、1978年、1-23頁。西村絢子『体育に生涯をかけた女性二階堂トクヨ』杏林書院、1983年。
- 52 McIntosh, *Physical Education*, 1968, p. 292. M.Treagus, 'Playing Like Ladies: Basketball, Netball and Feminine Restraint', *International Journal of the History of Sport*, 22-1, 2005, 88-105.
- \*本稿はヴィクトリア朝文化研究学会第19回大会(近畿大学、2019年11月23日) での特別講演の内容に加筆修正をしたものである。また本研究は、JSPS科学 研究費18K02323の助成を受けた。

——津田塾大学言語文化研究所研究員、西九州大学名誉教授

Sport and Gender in the Victorian Age: The strategies of women educators to transcend the gender boundary in modern sport

Setsuko Kagawa

This paper aims to trace the transformation of sporting activities during the Victorian era from a gender perspective, focusing on the strategies of women educators to promote physical training and sports among women. Physical exercise and sporting games were introduced into girls' secondary schools and women's colleges to build up physical strength of students to endure the strain of advanced education and competitive examinations. However, physical education of girls and women was unstable and contradictory faced with the dominant ideology of social Darwinism in the end of the 19th century. To accomplish the duty of motherhood, physical training was encouraged to women, only within the limits of their reproductive function. Against the burgeoning arguments of doctors and eugenicists warning women's overwork in physical and intellectual works, Martina Bergman-Osterberg(1848-1915), graduate of Royal Central Gymnastic Institution(RCGI) in Stockholm and Lady Superintendent of Physical Education at London School Board, challenged a new enterprise of founding a private physical training college for women in 1885.

Osterberg's strategy of physical education was notable in three points. Firstly, she attempted to adapt the Swedish system of gymnastics into the English tradition by combining it with games already established in middle class schools. Swedish gymnastics in its scientific nature based on physiology and anatomy could cope with the anxieties of schoolmistresses on their students' health. Osterberg's College attracted middle class girls

with its unique curriculum consisting of Swedish Gymnastics, games and other academic subjects. Secondly, in contrast with the RCGI in Sweden originally founded for men, she started a women-only physical college in Britain to create a new profession for women precedent to male counterpart. Thirdly, she attempted to build a broad network of physical education not only with school mistresses in Britain but with foreign educators by joining international organizations and conferences.

To conclude, the Victorian age was a remarkable epoch in the history of sport from a gendered viewpoint, as we can see the traditional borderline continually moved by increasing number of female sporting players, widening varieties of sporting activities among women, beginning of professionalization of female physical educator and the cooperative works of female educators across the national boundaries.